

# まったく怪しげな哲学入門

学力研 先生のための学校 校長 久保 齋

## 言い訳、いいわけ、まったくの言い訳

「ちよつと怪しげな哲学入門」がまったく言い訳の哲学入門になってしまいました。「アドラー心理学入門」とあと二冊ほど読んで、ぜひ、お話を書こうと思っていたのですが、時間がありませんでした。

「予習」で創る授業「づくり」が佳境に入っていて、趣味の卓球も休止し、誘惑もすべて断ち、ただひたすらに子どものノートと教科書を読んで原稿を打っています。

アドラーの原因論、目的論の考え方は私にとつては目から鱗の衝撃でした。

もう一つ「アドラー心理学入門」を読んでいる気が付いたことがあったのです。それは「モチモチの木」での豆太の行動についての分析です。自己受容、他者信頼、他者貢献ということが見事にモチモチの木では描かれているのです。僕はアドラーを読み

ながら「たぬきの糸車」「スイミー」「モチモチの木」「ごんぎつね」「大造じいさんとガン」「海の命」の教材分析をしているのです。まだうまく語れませんが、きつとかみなさんに語りたいたいと思っています。

言い訳で申し訳ないですが、「予習」で創る授業「づくり」の「ごんぎつね」の教材分析をお詫びのつもりで掲載します。みなさんのお役にたてばなによりです。またご意見をお待ちしています。

## 二、物語「ごんぎつね」の教材分析

主人公のごんはこの物語の中で、三度の成長、変革をとげます。まず、いたずら好きのごんが「死んだのは、兵十のおつかあだ」と気づき、自分のいたずらを後悔することによって大きく変わります。「夜でも、昼でも、辺りの村に出てきて、いたずらばかりしました。」というごんにとって、後悔

などということは皆無だったに違いないからです。そのごんが後悔したのです。

しかし、この変革は序にすぎませんでした。次に「おれと同じ、ひとりぼっちの兵十か。」と知ったとき、ごんはほんとうに兵十の寂しさや悲しみが解り、大きく変革をとげるのです。ごんの行動はこれ以後大きくかわります。ひとりぼっちの兵十へのおもいやり、なんとかひとりぼっち同士かわり合えないものかという切ない思いが読む側に伝わってきます。

しかし、この思いは伝わらず、ごんの行いは神様のせいにされてしまうのです。ごんは「・・・神様にお礼を言うんじやあ、おれは引き合わないなあ」とつぶやきながらも、「そのあくる日も」くりを持って兵十のうちに出かけていくのです。これはごんの兵十への思いがかかわり合いたい、自分と気づいてほしいという思いを持ちつつも、無償の愛へ変革をとげたことを意味しています。

ごんがこのように変革をとげ成長して高みへとたどり着きつつあったとき、こともあろうに愛して止まない。唯一かかわりた

かった兵十に撃たれてしまうのです。ここにこの物語の悲劇の大きさがあるのです。もちろん、この悲劇はごんの側にあるだけではなく、一瞬にしてすべてを悟った兵十の側にも深い悲しみをもたらす物語になっているのです。

子どもたちは、「この悲劇を」ごんの側からも、兵十の側からもしつかりと受け止めることができるようで、それなりの感想やごん、兵十へのお手紙などを書くことができます。

しかし、この物語の主題、「この物語で美南吉さんは読者にどんなことを伝えたかったのでしょうか。」「どうしてこのような悲劇が起こってしまったのでしょうか」と問ってみるとなかなか芳しい意見が出てこないのです。これは私たちの指導に何か問題点があるのです。私たち指導する側が十分に主題を把握していないから子どもたちも主題を把握できないと言ってよいと考えられるのです。

ではなぜこのような悲劇が起こったのでしょうか。それは兵十や加助や中山の人たちのごんに対する偏見が悲劇の根本であったということですか。ごんは「いたずらなや

つ」で「くりやまつたけを持つてくるようなやつ」ではない。人のためによいことをするのは人間かそうでなければ神様・・・動物が人間のために良いことをするなんてあり得ない」こんな偏見がすべての考えや気づきを停止させているのです。

この悲劇的展開の伏線は初めの大段落にちゃんと作者によって示されているのです。それがこの三つのいたずらです。

- ・いもを掘り散らす
- ・菜種がらに火をつける
- ・とんがらしをむしりとる

これを茂平じいさんから聞いたお話という設定から類推すると、なんぼいたずらぎつねとは言え、「菜種がらに火をつける」まではしないでしょう。村人のきつねに対する偏見が多分にふくまれているという読みができます。

子どもたちは、この三つのいたずらに焦点をあててやるとちゃんと村人たちの偏見状態を読みとることがができます。

物語の中で、ごんはどんどん変革し高みへ上っていくのに、兵十をはじめ村人はな

いるのです。唯一、兵十が気づいてくれるのではと、ごんも読者も期待し、「月のいいばん」から「お念仏がすむ」までわくわくするのですが、加助の言葉でその思いも打ち消されてしまうのです。

「ごんぎつね」の公開授業では最後の場面がよく扱われますが、主題を確かなものにするためにはその前の「月のいいばん」から「お念仏がすむ」までの読み深めが大切にされなければならないと考えられています。この場面の授業で「なぜ気づかないのだろう」と問いかけ、ごんを取り巻く状況を考えさせることが大切です。この立ちどまりが、子どもたちの読みを深め、主題へのアプローチを深めるきっかけをつくると確信しています。

兵十を含めた村人のごんというよそ者、異質なものへの偏見が事実をみることを妨げ、結局は二人を悲劇に追いやってしまう。このように主題を考えていくと、「ごんぎつね」で作者が読者に訴えるものは私たちの身近にある課題として、また人類の克服しなければならぬ今日の課題として普遍性を持ったものといえるのです。